

NEWSLETTER

ハマ発ニュースレター

横浜都市発展記念館館報●第35号

35
2021年7月

ご自由に
お持ちください



[特集]

スポーツの祭典と横浜

[展示余話]

ウィズコロナ時代に向けて —館蔵コレクション展での試み—

[コーナー展示]

市営交通100年記念 横浜市電のはじまり

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第35号 2021(令和3)年7月17日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜都市ふさと歴史財団 〒231-0021 横浜市中区日本大通12 TEL. 045(663)2424 FAX. 045(663)2453
題字/高橋健介 印刷/聖本/株式会社 エイコープリント 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

企画展のご案内

スポーツの祭典と横浜

開港以来、居留地に住む外国人によって様々な競技が持ち込まれた横浜は、日本における近代スポーツ発祥の地となり、市民は戦前からスポーツに親しんできました。

本年、2021(令和3)年に東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されることとなり、横浜において野球・ソフトボール競技とサッカー競技が行われます。当館ではこれを記念して、開港から現在に至る横浜スポーツのひろがりを、横浜に関連するオリンピックの歴史を中心に、資料からご紹介します。

【会期】2021(令和3)年7月17日(土)～9月26日(日)

【図録】スポーツの祭典と横浜 横浜都市発展記念館/編



第18回オリンピック東京大会
バレーボール女子金メダル
1964(昭和39)年 田村洋子氏所蔵

寄贈資料の紹介

令和3年1月から6月までに受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
横浜実測図(1881年)	1	南之園康仁
横浜停車場(着色写真)	1	南之園康仁
弁天通り(着色写真)	1	南之園康仁
『ル・モンド・イリュストレ(Le Monde Illustré)』 挿絵切抜き	1	南之園康仁
羽衣橋開通記念(写真帖、1926年)	1	中島良行



●表紙図版
横浜駅西口前のオリンピック街頭装飾
1964(昭和39)年 横浜市環境創造局所蔵

横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分～午後5時(券売は閉館30分前まで)
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開館時間等を変更する場合があります。

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)

■観覧料

上記企画展開催期間

企画展

一般300円/小・中学生、および市内在住65歳以上の方150円
(企画展の観覧券で常設展もご覧いただけます。)

常設展のみ

一般200円/小・中学生、および市内在住65歳以上の方100円

それ以外の期間

常設展のみ

一般200円/小・中学生、および市内在住65歳以上の方100円

※毎週土曜日は小・中・高校生無料

※「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>

MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

『目でみる「都市横浜」のあゆみ』(新装版)①

横浜都市発展記念館/編 定価1,362円

『近代横浜を掘る 洲千島からひろがる都市のすがた』②

横浜都市発展記念館/編 定価900円

『一枚の切符から昭和のあの頃へ
思い出す横浜のイベント、ニッポンの風景』③

横浜都市発展記念館/編 定価1,100円

DVD

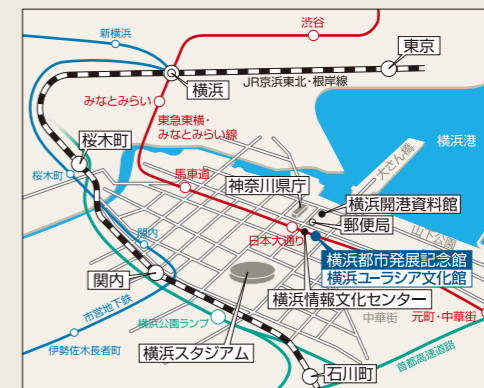
『映像でたどる昭和の横浜』シリーズ

定価各1,571円

第1巻・港とまちづくり

第2巻・都市の交通

第3巻・子どもたち



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄ブルーライン関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- J R 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス・神奈中バス「日本大通り駅南口」下車徒歩1分

※本誌は当館ホームページでも
ご覧いただけます。



編集後記

未曾有の感染症の流行によって、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催は本年に延期され、当館の企画展も会期の変更を余儀なくされました。ともあれ、この機会にオリンピックを中心とした横浜のスポーツの歴史をひもといてみるのはいかがでしょうか。目の前の祭典をより深く楽しむことができると幸いです。(岡)

◎次号発行予定 令和4年1月頃

スポーツの祭典と横浜

本年は東京2020オリンピック・パラリンピックの開催年である。横浜は、開港以来、居留地の外国人が様々なスポーツを持ち込んだ近代スポーツの発祥の地の一つであり、明治期以降、日本人の市民にもスポーツが浸透してゆくことになる。戦後、激しい空襲被害を受けた横浜では国民体育大会をはじめ、様々なスポーツイベントが開催され、人々の復興機運を高めた。また、1964（昭和39）年の第18回オリンピック東京大会では、複数の競技が市内で開催され、多くの市民が熱狂したほか、海外からの観客が多く市内に滞



① オリンピック・フェスティバル
1964(昭和39)年 横浜市史資料室所蔵

在することになる。本稿では、オリンピック東京大会と横浜の関係について紹介したい。

オリンピックの開催と横浜市

1959（昭和34）年の第55次国際オリンピック委員会（IOC）総会において第18回オリンピック東京大会が1964（昭和39）年に開催されることと決定すると、海の玄関口である横浜市は海外から来る多くの観客を受け入れる態勢を整える必要に迫られ、大規模の整備や外国人のための案内所の設置など様々な取り組みがなされた。市ではオリンピック前年の1963（昭和38）年にオリンピック事務局やオリンピック東京大会横浜市実行委員会を設置し、市内で開催される競技が滞りなく進行するよう尽力したほか、同年に横浜市美化運動実施本部を設置するなど、都市環境の整備にも取り組んだ。また、オリンピック開催年の6月には三ツ沢公園陸上競技場でオリンピック・フェスティバル①が開催されるなど、機運醸成イベントも積極的に行われた。オリンピックが開催されると、市内には約4400人の外国人が宿泊し、大規模に停泊した客船に

約3800人が船中泊するなど、市中は大きく賑わうことになる。これらの人々を歓迎するため、各地にオリンピック装飾が施されたほか、オリンピック東京大会横浜歓迎委員会が組織され、市内各地でイベントが開催された。

オリンピック競技会場となった市内の施設

オリンピック東京大会開催決定後、横浜市はヨット競技会場として立候補するが、諸事情により実現せず、レスリング競技の誘致も図ったが実現しなかった。しかし、市当局者の尽力によって、大会開催前のバスケットボール競技予選とバレーボール・サッカー競技の本戦会場となることが決定し、市ではこれらの競技場の整備を進めることになる。

市内でオリンピック競技会場となった横浜文化体育館②は、横浜港開港100周年を記念して、スポーツと文化の普及振興を目的に1962（昭和37）年に開設された施設である。同館は、オリンピック東京大会では、バスケットボール競技予選とバレーボール本戦の第二会場（第一会場は駒沢室内球技場）となり、日本全国の



② オリンピック競技会場となった横浜文化体育館
1964(昭和39)年 横浜市環境創造局所蔵

年に横浜ユニテッドアリーナが建設される予定になっていた。また、隣接地には、横浜武道館が2020年に開館し、横浜文化体育館の歴史資料を保存・管理している③。

市内で開催された競技のうち、サッカー競技が行われたのが、三ツ沢公園内にある三ツ沢公園球技場（現ニッパツ三ツ沢球技場）④である。オリンピック東京大会では、サッカー競技の国内5会場のうちの一つとして使用された。この際、総工費約2億円をかけて観客収容力を増員する工事を行い、近代的なサッカー場としての施設の充実が図られた。本球技場ではグループ予選5試合と準々決勝が行われ、当時、今ほどメジャーではなかったサッカー



③ 横浜武道館で保存されているオリンピック関係資料群
横浜武道館所蔵



④ 三ツ沢公園球技場でのサッカー競技
1964(昭和39)年 横浜市環境創造局所蔵



⑤ 選手村内食堂の厨房に立つ大和丈司氏
1964(昭和39)年 大和弘子氏所蔵



⑦ 国旗掲揚奉仕の任についたボーイスカウト横浜第24団
1964(昭和39)年
横浜市史資料室所蔵

の魅力を多くの人々に伝えた。本球技場は、現在でもサッカーリーグや全国高校サッカー選手権大会の会場として使用されるなど、国内のサッカー文化を支える役割を果たしている。球技場内の貴賓室や隣接するレストハウスには、オリンピック当時の資料が多数保存・展示（非公開）されており、当時の活気を偲ぶことができる。

オリンピックを支えた横浜市民

第18回オリンピック東京大会では、各国の選手たちを支える多数の大会

スタッフが活躍したが、このなかには、横浜市民も多く含まれている。市内の西洋料理レストランで働いていた大和丈司氏は、東京代々木の選手村に設置された「桜食堂」のシェフとして、大会期間中数千人もの選手のために料理の腕を振るい、選手たちの英気を養う役割を果たした⑤。

また、神奈川県におけるサッカー教育の第一人者であった横浜市立大島中学校教諭の高野一彦氏は、オリンピック蹴球競技役員として大会運営の円滑化に勤めた⑥。このほか、大会では会場に多数の国旗を掲揚することが定められていたが、国旗掲揚には、国旗の扱いに慣れたボーイスカウトがその任に就いた。このうち、金沢区を活動エリアとするボーイスカウト横浜第24団に所属していた川島一美氏は、各会場を指揮する本部要員として尽力した⑦。大会の成功の陰に、こ

れらの人々の献身的な下支えがあったことは、記憶されるべき地域の歴史といえるだろう。

以上のように、第18回オリンピック東京大会の成功に横浜市が果たした役割は大きく、この際に整備された施設は後々まで市民のスポーツ環境の向上に寄与した。今回の企画展「スポーツの祭典と横浜」では、本稿で紹介した資料以外にも、市にゆかりのメダリスの資料など、貴重な資料を多数ご観覧いただけるので、是非、ご来館をいただければ幸いです。

（西村 健）



⑥ 高野一彦氏に贈られた感謝状
1964(昭和39)年
高野家所蔵

余話 展示

ウィズコロナ時代に向けて

―館蔵コレクション展での試み―



1 企画展チラシ

館蔵資料に向き合う

2021(令和3)年最初の企画展は、当館の館蔵資料をもとに都市横浜のあゆみを振りかえる「後世に残したい、都市横浜の宝―館蔵コレクション展―」(2021年1月16日～3月28日)でした(1)。展示概要は前号で紹介したとおりですが、新型コロナウイルスの感染拡大により、年度当初に予定していた企画展の開催が難しくなってきたことから、予定を変更して開催した

企画展でした(2)。

展示を企画するにあたっては、あらためて学芸員全員で館蔵資料の総点検をおこない、常設展示の「都市形成」ゾーン(都市計画のはじまり/都市の膨張と交通網の整備/戦争と都市計画)の流れを軸に、常設展示ではカバーしていない戦後の高度経済成長期までを加えた展示構成としました。

そして今回は企画展図録を製作する代わりに、展示オープンにあわせて、当館出版物のロングセラーである常設展示図録「目でみる「都市横浜」



のあゆみ」の新装版(3)を発行しました。2003(平成15)年の開館以来、4刷まで版を重ねていた常設展示図録でしたが、これまでの内容にあらたにコラムを追加し、さらにレイアウトデザインも一新した新装版として刊行しました。横浜の歴史への手引きとして、引き続き、多くの方に同書を手に取っていただ

き、活用していただければ幸いです。

企画展タイトルについて

では、ずいぶん頭を悩ませましたが、博物館の歴史資料は地域にとって豊かな財産であるという思いを込めて、「後世に残したい、都市横浜の宝」としました。「宝」という言葉から、きらびやかな資料が並ぶ展示をイメージされた方も多かったようですが、私たち地域博物館にとっては、皆さまからご寄贈いただいた資料は「宝」であり、これらを後世に伝えていくことが重要な使命で



3 「目でみる「都市横浜」のあゆみ」新装版

す。展示資料はできるだけ寄贈資料からセレクトするようにした結果、展示資料300点のうちおよそ8割にあたる237点が寄贈資料となりました。

あいにく展示がオープンした1月は、新型コロナウイルスの流行第3波にともなう、2度目の緊急事態宣言が発出された時期でもあり、この影響で、毎年開催していた3月の開館祭も、昨年引き続いて中止の決断をせざるを得ませんでした。しかし、こうした状況下でも、会場に足を運んで展示をご覧いただいた方からは、震災と空襲という二度の災禍を乗り越えて発展してきた横浜の歴史は、「このコロナ禍の中、明日へ大きな励ましともなりますので、ぜひ横浜市民の皆さんには見てほしいです」という嬉しいご意見を頂戴しました。また私たちとしても、これまで貴重な資料をご寄贈くださった皆さまに、展示というかたちで感謝の気持ち

を報告することができました。

ウィズコロナ時代の試み

昨年6月の再開館から一年が経ちましたが、コロナ禍では、これまでのように多くのお客様に会場へ足を運んで展示を観ていただくという当たり前の

ことが当たり前でなくなりました。博物館活動を再開するにあたって、当館では、入館に際して接触の機会を減らし、また館内での密な状況の発生を防ぐために、オンラインでのチケット事前予約システムを導入するなど、あらたな試みをおこなってきました。

そうした試みのひとつが、SNSやオンラインツールの積極的な活用です。すでに多くの博物館・美術館で実施されていますが、直接博物館へ来場して展示を観覧することができない方のために、前回の企画展「近代横浜を掘る」から、Twitterによる情報発信(4)、そして公式YouTubeチャンネルでの解説動画の配信(5)をスタートさせました。本企画展でも、展示担当が各コーナーの見どころを解説する動画5本を制作・公開しています(6)。当館は展示室が狭いこともあ

り、まだ対面での展示解説は再開していませんが、この解説動画が少しでも展示の理解の助けになればと考えています。

そして本展の会期中には、当館所蔵の映像資料から、戦後の横浜市政ニュースである「神奈川ニュース」の映像公開をスタートさせました。「神奈川ニュース」については本誌14号(2010年8月)で詳しく紹介していますが、当時映画館で上映された数分程度の短いニュース映画で、当館ではこれらの作品をテーマ別に編集して、DVD映像でたどる昭和の横浜」として全3巻を製作・販売してきました。今回、展示室内で「神奈川ニュース」セレクションとして、横浜が開港100周年を迎える1958(昭和33)年までのニュースから12点をセレクトして上映し、同じものをYouTubeでも公開しました

(7)。このセレクションにはDVD未収録のニュースも含まれており、そのうちのひとつ、1955(昭和30)年4月の「消火避難訓練」は、戦後、子どもたちの保護活動をおこなった山手の聖母愛児園での訓練の様子を記録した貴重な映像です。

オンラインでのコンテンツ制作はまだ始めたばかりですが、博物館に来た人にも、そうでない人にも、楽しいコンテンツを提供することを目指して、今後も内容を充実させていきたいと考えています。

(青木 祐介)



5 解説動画の収録風景 (写真は企画展「近代横浜を掘る」当時のもの)



6 オンラインでの見どころ解説



7 「神奈川ニュース」セレクションから「消火避難訓練」



4 Twitterでの展示設営風景の紹介

市営交通100年記念 横浜市電の はじまり

1921（大正10）年、横浜市に電気局（現在の交通局）が設けられ、市営の交通事業が開始されました。今年はそのからちょうど100年の節目にあたります。常設展示室内にあるコーナー展示では、当館で所蔵する資料をもとに、100年前に誕生したこの横浜市電（路面電車）の姿を紹介しています。



①「横浜桜道電車トンネル」絵葉書 1910年代、当館所蔵
麦田トンネルを抜ける横浜電気鉄道の路面電車。

街路に敷設したレールを電気で走る乗り物、路面電車（電気軌道）は「チンチン電車」とも呼ばれ、明治時代の後半に日本に登場しました。その用途は、温泉や寺社などの観光地と鉄道の駅とを結ぶものもありましたが、主に都市（市街地とその周辺）の移動手段でした。

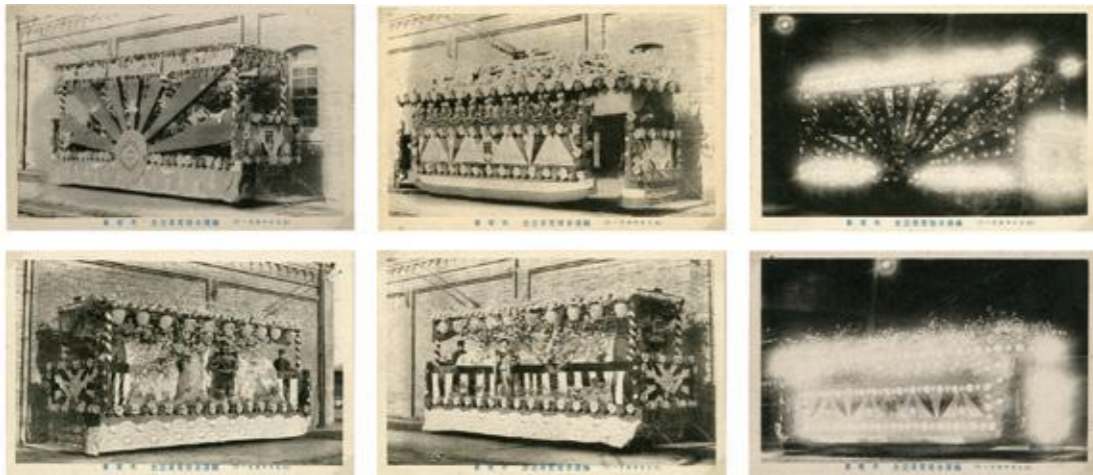
横浜では1904（明治37）年、横浜電気鉄道という民間会社によって、市内の路面電車が開業しました。しかし、その経営は経済変動の影響を受けて不安定で、運賃の値上げやストライキが企てられるなど、市民の反発を招きました。道路や水道と同じく路面電車は都市の公共インフラであるとの認識が高まり、今から100年、横浜市はこれを交渉の末に買収し、市電としたのです。



②「横浜電車案内」 1920（大正9）年頃、長谷川弘和氏旧蔵
市営化直前の横浜電気鉄道の路線案内図。



③「横浜市営電車記念」絵葉書
1921（大正10）年、当館所蔵
市営化を記念して花電車が運転された。



電車事業の運営にあたって、横浜市は市債を発行して資金を調達し、線路の改良や車両の増備をはかって乗客数・収入を安定させました。路線網は桜木町や馬車道を中心に、本牧・滝頭・弘明寺・西戸部の各方面へ延び、当時の横浜の市街地をカバーするものでしたが、さらに間門や杉田、保土ヶ谷への延伸も予定していました（三線計画）。

しかし、市電の発足の翌々年に関東大震災（1923年）が発生します。所有していた車両約150台の半数以上を焼失し、軌道や架線も破損するなど、大きな被害を受けました。

それでも、震災からの復興事業を通じて、市電は大きく発展しました。区画整理によって拡張された街路の中央にレールが移設され、また、震災前に

計画された三線に加えて、生麦・六角橋・洪福寺の各方面へ郊外路線が新設されました。1930（昭和5）年までに路線の総距離は震災前の二倍以上の約46キロとなり、戦後の最盛期の昭和20年代から30年代、「市民の足」として一日に約30万人が利用し続ける路線網は、この時期にほぼ完成します。

また、電気局は市電を補完するため、1928（昭和3）年に市営バスの営業も開始します。民営のバス（乗合自動車）は大正時代より、主に農村部で運行を始めていましたが、これが都市交通としてのバスの嚆矢となりました。市営バスの路線は、市電の線路の敷設が難しい根岸台や三ツ沢、港南などの丘陵地、そして新たに横浜市に編入された鶴見の工業地帯を中心に設定されました。

さて、震災からの復興を果たし1930年代に入ると、国内の経済不況の影響を受けて輸送需要が停滞します。そこでさまざまな増収策がはかられました。夏季には本牧・根岸・磯子の海水浴場へ利用客の誘致をはかり、盆踊り大会などのイベントも電気局が主催しました。また、天井を外した「納涼電車」を走らせたり、クロスシートを備えた車両が「ロマンスカー」として親しまれたのもこの頃でした。

戦争と接収、高度経済成長の時代を経て、1972（昭和47）年、横浜市電は廃止されました。自動車交通の発達と、都市の巨大化を受けて、市営交通は路面電車を中心とするものから、高速鉄道（地下鉄）と路線バスを組み合わせたものに転換されたのです。

（岡田直）



④「横浜市第一回電車事業公債証書」
1921（大正10）年、横浜市交通局寄託・当館保管



⑤市電に登場した女性車掌
1934（昭和9）年、『横浜グラフ』（当館所蔵）より